



デジタル先導社会と人間成長過程のマッチング

佐藤 征夫

去る7月1日にJASTJは創立30周年を迎え、記念パーティーを盛会裡に終えました。創設時は、プロのジャーナリスト50人ほどの親睦会的な集まりであったそうですが、30年の積み重ねで今やプロだけでなくジャーナリズムやコミュニケーションに関心のある人たちを含む200人以上の会員の組織になっています。この間、活動を拡大し活発化させ、会員増に努めながら、自由で独立性の高い組織を支えてこられた歴代会長や関係者の皆様に深甚なる敬意を表します。

筆者は、以前から科学技術関係のジャーナリストの方々と科学技術振興の行政官としてお付き合いいただいていたのですが、JASTJの活動については余り知らずにおりました。現在理事長を務めております財団がJASTJの賛助会員であったことが縁で、2018年度より監事として組織の内部から諸活動に触れるようになり、その活発さ、質の高さに大いに驚かされました。具体的には、一流講師の月例会、会員有志の指導が特徴の科学ジャーナリスト塾、科学技術分野の優れた出版、報道等を顕彰する科学ジャーナリスト賞などで、どれも素晴らしく、科学技術ジャーナリズムの向上、発展に寄与しています。

現在、生物・医科学分野での目覚ましい進展、地政学リスクの高まりによる世界規模でのサプライチェーンへの影響、大規模自然災害の頻発等、科学技術を取り巻く環境は大きく変動していて、科学ジャーナリストの取材対象が広がってきています。

また、デジタル化の推進、とくにChatGPT等の生成AIの発展により、社会全体がデジタル先導社会へ

と移行しつつありますが、生成AIによって生み出される情報は、その量が指数関数的に増大するのに対して、人間や社会組織の成長・発達の成長曲線は緩やかであることから、身体知のような成長に伴う情報の獲得や人間が処理・対応できる情報量には限界があり、ギャップが益々広がりつつあります。

デジタル化による個々人の学習進捗度と、成長年齢に大きく依存する体育、徳育の適齢時期とのギャップに対して、年齢をベースとした従来の学校・教育システムでは対応できず、変革が必要となると思われます。また、既に一部の企業では経営陣も含めて全社的に生成AIを活用しつつあり、今後の組織運営が大幅に変わる可能性があるなど、デジタル先導社会で益々広がるギャップへの対応が求められています。

今後、科学ジャーナリストは、そのギャップの橋渡ししないしマッチングの役割を従来以上に強く意識させられると思います。従来は、科学ジャーナリストの取材先は科学者、技術者、行政官などで、取材先から得られる情報の真偽はほとんど問題になりませんでした。今後は、偽情報など生成AIがもたらすリスクの監視機能も求められるでしょう。

メディアと科学技術を取り巻く環境が激変する中で、今年度中に纏められる予定の30周年誌がさらに多くの人々にJASTJへの関心を呼び起こし、上述のような新しいメディア環境でのJASTJの今後の活動指針のベースとなることを期待しております。

(JASTJ監事/ (一財) 新技術振興渡辺記念会理事長)

CONTENTS

巻頭言	1
ニュース	
賑やかに創立30周年記念パーティー	2
科学ジャーナリスト賞2024 贈呈式・受賞者の声	4
ESOF@ポーランド開催報告	6
世界科学ジャーナリスト連盟	7
特集 JASTJ創立30周年	
振り返りに始まる30年後への展望	8

活動の源流と人 一例会、見学会、シンポジウム	9
見学会報告 (6月) 公益財団法人実中研	10
例会報告 (7月) 大学のガバナンス	11
例会報告 (8月) AI時代に記者や編集者は生き残れるか	12
WEB井戸端会議 サイバー攻撃デモ/紅麹問題	13
オピニオン/賛助会員・団体	14
理事会から/賛助会員・団体	15
事務局だより/新入会員/会員のBOOKS	16

Since 1994

30th Anniversary

約120人が参加して賑やかに創立30周年パーティー

日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）の創立30周年を祝うパーティーが2024年7月1日、日本プレスセンタービル10階ホールで開かれた。会員、賛助会員、科学ジャーナリスト塾の元塾生を中心に想定を上回る約120人が集まり、終始和やかな雰囲気にも包まれた。



参加者全員の記念写真

受付を済ませた参加者は18時半から広い会場に入り、飲み物を片手に談笑したり、壁際に展示されたJASTJの出版物や過去の会報などを見たりした。壁に貼られた「30年の年表」をじっくり眺める人もいた。

司会進行は瀧澤美奈子副会長と寺沢和洋理事が務め、19時に室山哲也会長が「今日はさまざまな方にお集まりいただいた。いろいろな人と話してJASTJという団体のウィングの広がりを体感していただきたい」と開会挨拶。続いて、科学ジャーナリスト賞の選考委員を2011年（第6回）から務める相澤益男・元東京工業大学学長がグラスを持って登壇し、賞の歴史を振り返りなが



会場のあちこちで会話の輪ができた

ら乾杯の音頭をとった。

歓談をはさんで高橋真理子副会長がスライドを使いJASTJ創設の経緯と月例会や科学ジャーナリスト塾、国際活動などの事業を簡単に説明。歴代会長も紹介し、故人となられた初代岸田純之助、第3代小出五郎の両氏をのぞく第2、4、5、6代会長の牧野賢治、武部俊一、小出重幸、佐藤年緒の各氏が壇上で一言ずつ挨拶した。



登壇した歴代会長。左から牧野賢治さん、武部俊一さん、小出重幸さん、佐藤年緒さん。

このあと、一瞬会場が暗くなってスペシャルゲストのブラック星博士（実は井上毅・明石市立天文科学館長）が入場。プラネタリウムに関するクイズで観客に挑み、途中から登壇したJASTJ理事で国立天文台准教授の縣秀彦さんとともに場を盛り上げた。



ブラック星博士と国立天文台の縣秀彦さんの掛け合い

終盤では、賛助会員を代表して海洋研究開発機構（JAMSTEC）理事の河野健さん、東京サ

ラヤ株式会社代表取締役社長の更家富美子さん、株式会社構造計画研究所会長の服部正太さんからお祝いのメッセージをいただいた。20時半に滝順一事務局長が閉会の挨拶をし、最後に全員が会場前方に集まり記念写真を撮った。



賛助会員として挨拶した河野健さん、更家富美子さん、服部正太さん（左から）

JASTJは、ユネスコ（国連教育科学文化機関）が主催して1992年に東京で開いた「科学ジャーナリスト世界会議」の日本組織委員会が母体となって設立され、1994年7月1日に第1回総会を開いた。10周年にはミジンコ好きで知られるサクソ奏者坂田明さんのトークと演奏に加えて評論家の立花隆氏らが参加するシンポジウム「21世紀の科学と社会」を開き、20周年には記念行事「科学とウィンナワルツの夕べ」を催した。

30周年は何をするか？ 2024年に入って早々の理事会で室山会長が投げかけた問いに、理事たちからはさまざまな意見が出た。話し合いを進めるなかで、「堅苦しいことはしない」「コロナ以後、実際に会う機会が減っているので、人々が直接会う機会にする」「元塾生にできる限り声をかける」といった基本方針が固まっていった。



30年の年表の脇で談笑する元塾生と井上能行理事（左写真）
司会の瀧澤美奈子副会長と寺沢和洋理事（右写真）

果たして何人ぐらい参加するのか。まったく見当がつかなかったため、会員と元塾生を対象に「ぜひ参加したい」「できれば参加したい」「参加できない」などから選んでもらう意向調査を3月



集まった科学ジャーナリスト賞有識者委員。左から浅島誠さん、白川英樹さん、黒川清さん、相澤益男さん。

に実施した。約90人から回答があったが、「ぜひ」は24人。想定されたことではあったが「できれば」のボリュームが一番大きく、そのうちの何割が参加するのか、やっぱり読めないのだった。

ただ、この意向調査が「7月1日にパーティーがある」と知らしめる役割を果たしたのは間違いない。会費は、申込の際にクレジット払いするのと当日会場払いの2コースを用意した。このため、受付準備は煩雑をきわめた。当日配布する名簿づくりをはじめ手間のかかる作業を引き受けてくれた理事の井内千穂さんと事務局の中野薫さんに改めて深く感謝したい。



受付を担当した井内千穂理事、西野博喜理事、事務局の中野薫さん（左から）

会場手配や支払いは滝順一事務局長が担当した。申込サイトは柏野裕美副会長がつくった。準備を進めたスタッフたちは、参加者たちの笑顔に苦勞が吹き飛ぶ思いだったろう。企画した私は「会費3000円を例外なく徴収」と、たとえ礼を失う場合があるとうわりやすさを優先したのが成功の要だったと分析している。

会費収入を経費から引いた「持ち出し額」は463,492円だった。50万円の予算を組んでいたので、収支面からも大成功だった。

（副会長 高橋真理子）

科学ジャーナリスト賞2024 贈呈式

大賞はNスペ「映像記録 関東大震災」

下野新聞など3点に優秀賞

優れた科学報道や科学への理解を深める著作や博物館活動などに贈る「科学ジャーナリスト賞2024」の贈呈式を6月8日に日本プレスセンタービルで開いた。

大賞に選ばれたNHKスペシャル「映像記録 関東大震災 帝都壊滅の三日間」を制作したNHKの取材班代表、木村春奈さんに選考委員の白川英樹・筑波大学名誉教授から記念の盾が手渡された。白川さんは「これから起きるとされる大きな地震の防災を考える上で貴重な番組」と作品を称えた。

優秀賞に選ばれた下野新聞連載「アカガネのこえ 足尾銅山閉山50年」の取材班代表、島野剛さんには、選考委員の浅島誠・東京大学名誉教授が盾を手渡し、浅島さんは「50年の時の流れに埋もれていた事実を丹念に取材した地方紙ならではの」と評価した。

優秀賞の書籍「1100日間の葛藤 新型コロナ・パンデミック、専門家たちの記録」の著者、尾身茂さんは選考委員の相澤益男・東京工業大学名誉教授から盾を受け取った。相澤さんは感染症専門家たちの活動に改めて敬意を表するとともに「専門家と社会との共創的コミュニケーション」の必要性について言及した。

Yahoo!ニュースオリジナル特集「経口中絶薬に関する連載3回」で優勝賞に選ばれたジャーナリストの古川雅子さんには選考委員の小林傳司・大阪大学名誉教授が盾を手渡した。小林さんは「技術開発や制度設計に女性の参画がない社会のありようが問題

の根っこにある」と指摘した。

最後に、選考委員の大隅典子・東北大学教授は選考全体を「白熱した議論の結果、科学と社会の関係について示唆に富む作品が選ばれた」と振り返った。また選考に漏れたものの印象的な作品として、AI（人工知能）を扱ったNHKの「フロンティア」や海ごみ問題の丹念な取材をした地方民放局の番組、奈良市の私設博物館「ならまち糞虫館」を挙げた。

（事務局長 滝順一）

受賞者の声

テレビ番組「NHKスペシャル 映像記録 関東大震災 帝都壊滅の三日間 前後編」

100年前の教訓を未来にいかす

木村春奈さん（NHKスペシャル関東大震災取材班代表）

科学ジャーナリスト賞の大賞に選んでいただき、たいへん光栄に感じている。東日本大震災の時も番組を制作したが、私たちは何のために番組を作るのか悩んだ。今だけではなく将来の震災において少しでも多くの人命を救うことに役立つ番組を作りたい。そう思って取材を続けた。今回の関東大震災から100年の番組も同じ思いで制作した。番組では100年前の証言や映像を使わせていただいたが、それは東北の被災地で聞いた証言と驚くほど似ていた。

普段の番組とは違う難しさがあった。普段であれば納得するまで取材し尽くすのだが、今回は残された映像や証言だけから本当に伝えるべき現代に通じる教訓などが見つかるのだろうかとの懸念が制作スタート時点ではあった。ワンカット、ワンカット何か写っていないか目を凝らしていると、人々の表情や飛ぶ火の粉などが見えてきた。また高精細・カラー化するにあたって当時の絵葉書や建物の設計図を調べて、専門家と相談しながら色をつけていった。放映後、「自分ごと」として見ていただいたとの反響をいただき、本当に作って良かったと思った。



科学ジャーナリスト賞（J賞）の受賞者（前列）と有識者の選考委員（中列）の皆さん（東京・千代田の日本プレスセンターで開かれた贈呈式で）。（撮影 滝順一）

新聞連載「アカガネのこえ 足尾銅山閉山50年」

被害者を置き去りにしない社会を

島野剛さん（下野新聞「アカガネのこえ」取材班代表）

取材にご協力いただいた方々にこの場を借りてお礼を申し上げたい。閉山から半世紀、私たちの足元の足尾から学ぶことがあるのではないかと取材を始めた。新聞社の中にも閉山前を知っている者はいない。教科書では「足尾銅山鉍毒事件」と紹介されるが、ゼロから学んでいこうと考えた。「ヤマ」で働いた人をはじめ地元で暮らす方々の息遣いを肌で感じて取材を進めた。



福島第一原発事故の被災地や水俣病で苦しむ人々にまで取材を広げ深めていった。これらは国策や社会全体の繁栄を追求した結果、被災者・被害者として置き去りにされる市民が生まれる点で構造は共通している。

連載を読んでいただいて、誰も取り残さない社会のありようを考えていただければ感にたえない。下野新聞では今回の連載だけでなく、たびたび足尾の特集を組んできた。足尾の光と影を伝え続けていくことは、地元の新聞社としての使命だと考えている。足尾は科学技術の進展に伴い成長した一方で、今も半永久的な鉍害対策が続く。科学技術をどう活用するかは大企業や専門家の専権事項ではない。市民が我が事として考える仕組みが必要だと感じる。

書籍「1100日間の葛藤 新型コロナ・パンデミック、専門家たちの記録」

伝わらなかった専門家の思い

尾身茂さん（新型コロナウイルス感染症対策分科会元会長）

著者は私の名前だが、新型コロナ対策に関わった専門家みんなの思いを記した本だ。分科会の仕事から解放され記録を書かねばならないと思っていた時に出版社から提案があった。国の対策において専門家が出した100回を超える提言が国民生活に影響を与えたわけだが、提言をした者の責任としてきちんと記録に残すことは義務だと考えた。

首相と並んでの記者会見は仕事の100分の1に

も満たない。合理的で納得のいく提言を作ることに専門家たちは長い時間を費やした。提言にはデータや論文の根拠があり歴史の審判に耐えられると思っているが、提言の結果の一部しか報道されず、私たちの本当の思いが伝わらなかった。たとえば感染対策と社会経済活動の両立について早い段階から提言したのだが、専門家が社会を制約するばかりだと受け取られた。これは私たちの力不足だった。コミュニケーションの課題についてメディアの皆さんと一緒に話し合っていきたい。



ウェブ連載「Yahoo!ニュースオリジナル特集 経口中絶薬に関する連載3回」

女性の性と健康、人権を考える「種」に

古川雅子さん（ジャーナリスト）

選考理由に「多くの人に読んでもらいたい」とあったのがうれしく思った。フランスから遅れること35年。日本ではなぜ経口中絶薬の承認が遅れたのか。その問いをまずたてて取材を始めた。専門家に尋ねても明確な答えは誰も持っていなかった。女性の健康と安全についてメディアも社会も関心が薄かった結果ではないかと感じた。



古い論文や資料をあたり2つの重要な文書を見つけた。日本産婦人科医会の当時の会長の署名入りで厚生労働省宛に出された要望書は「医療機関の収益性」について訴えていた。インタビューして、医会が当初から中絶薬に後ろ向きだった証言を得た。また医会の事業報告書にある記録から特定の政治家に政治献金が支払われていたことが分かった。証言と事実をつなぎ合わせて、性と健康と人権を考える「種」を届けられた。

編集者として並走していただいた森健さんとYahoo!編集部の方々のサポートがあって記事が生まれた。また仕事に邁進させてくれた家族に感謝したい。

欧州各国の科学の動きの一端を知る

EuroScience Open Forum 2024 開催報告

EuroScience Open Forum 2024が6月12～15日、ポーランド南部の工業都市カトヴィツェで開催された。スローガンは‘Life changes science’。エネルギー転換、持続可能な環境、文化的アイデンティティと社会の変革、科学的卓越性の中の変革、健康な社会、デジタルトランスフォーメーションの6つのテーマで、130以上の講演やセミナー、ワークショップなどが開催された。

科学者とジャーナリストが連携して情報提供を

今回は名前とメールアドレスを登録するだけでも無料で参加でき、高校生や大学生が個人あるいは学校単位で訪れていた。まさにOpen Science。参加者は40カ国から約3500名に上った。

印象的だったのが、リトアニアのヴィルニウス大学の生命学者、Smirnovienė Joanaさんの「科学的影響力によって社会（市民）の健康度を改善する」と題したプレゼンテーションである。

Smirnovienėさんは、まず科学的なバックグラウンドを持たないインフルエンサーの影響などで市民がエビデンスのない商品やフェイクニュースにだまされる現状を紹介し、リトアニアではソーシャルメディアのチェックに科学者が協力していると話した。

一方、科学者が科学コミュニケーターになれるかといえば、科学者の多くは研究や教育に忙しく、専門性が狭く、コミュニケーション能力を磨く機会がなく、コンフリクトを避ける習性もあると述べた。

自身は2021年に「ロレアル バルティック - リトアニアにおけるユネスコ ‘女性科学者’ 若手人材賞」に選ばれ、メディアの取材や学校訪問が増えたことを契機に科学コミュニケーターとしての役割を好きになったという。

2022年にはリトアニアのジャーナリズムセンターが科学者のための科学コミュニケーションコースを作り、そこでジャーナリストとともに著名な科学コミュニケーターの講義を受け、撮影の練習をするなどした。科学者とジャーナリストを結びつけると市民に対してわかりやすい資料を作成できる、それによって市民がフェイクニュースにだまされず、効果的な治療法を選び、より健康になって、無駄な出費も避けられる、と指摘。さらに、科学者は視野が広がり、キャリアパスも多様になるというメリットもあると強調した。

研究施設の廊下に見た文理融合

最終日には見学会やワークショップが企画され、私はシレジア工科大学の欧州ヘルステックイノベーションセンター（EHTIC、2021年設立）を訪ねた。EHTICでは、バイオメディカルエンジニアリングの基礎から応用までの研究が1か所で行えるよう、最新の装置や施設が設置されていた。例えば、スポーツ選手のパフォーマンス向上のためのトレーニングや難病などのリハビリテーションを拡張現実（AR）や仮想現実（VR）を用いて広いスペースで行える。

建物内には各階にテーマカラーがあり、廊下の壁面には医療に関する大きな絵画やイラストがある。そこで見つけた‘art・on・campus’（キャンパス内の芸術）というロゴについて調べてみると世界の大学でart・on・campusの活動が行われていることがわかった。真の文理融合はこういうところから始まるのかもしれない。

帰りの車中でシレジア医科大学の図書館員が「ESOFがカトヴィツェで開催されてシレジア地方の大学や研究機関の間でのコミュニケーションが活発になった」と話していた。地元にもこのような副産物を生むESOFは、ジャーナリストにとっても科学の今と未来を学ぶ場である。主催者のEuroScienceの今年1月の破産申請によって次回開催は不透明。形を変えてでも今後も開催されることを願う。

（会員 小島あゆみ）



EuroScience Open Forum 2024の開会式。進行はポーランド語で、英語の同時通訳付きだった（小島あゆみ撮影）

世界連盟 (WFSJ) の理事会・事務局の混乱

2020年以來、世界科学ジャーナリスト連盟 (WFSJ) 事務局の混乱が続いています。

2019年の科学ジャーナリスト世界会議 (WCSJ ローザンヌ) までは、順調な運営が続いていました。しかし2020年からのCOVID-19パンデミックにより、対面の事務局会議、理事会招集ができなくなり、オンラインだけの連絡体制を続けた結果、2023年のWCSJコロンビア会議で、財務報告、活動計画などの承認を受ける「年次総会 (AGM)」が開催できないなど、事務局機能の不全が表出、改善も進みませんでした。

事態打開のため、2024年6月11日に開催された理事会で、従来の会長、副会長を交代させ、新執行部を選ぶ評決が行われました。新執行部は、来年(2025年)に迫ったWCSJ南アフリカ会議、2027年のロンドン会議への実務を進めると、世界連盟の全会員にアナウンスしました。

ところが、解任された会長・副会長は、理事会の議決と交代人事の無効を訴えたため、7月5日に臨時の「特別会合」(オンライン)を招集。30近い団体代表らが参加し、新執行部の活動を16対9の評決で承認。前会長・副会長の身分問題は、並行して調査を進めることになりました。新事務局では、2024年11月20日に、ハンガリーで年次総会と理事会を開くことを決定。その前に、新理事4人を補充する「理事選挙」を10月に実施することを発表。各組織に、理事候補の推薦を求めています。

混乱の背景

WFSJの年次総会は、構成する各国の組織代表が出席し、事務局が前年の会計・事業成果報告、次年度予算・事業計画、を報告し、承認を受けることが決められています。しかし、2023年3月の世界会議 (WCSJ 2023コロンビア) で、連盟執行部は年次総会報告ができず、ここから混乱が始まりました。コロナ・パンデミックのため財政的にひっ迫、実務処理の中心的な存在である専務理事 (Executive Director) が不在になってしまったことなどが原因です。

年次総会は、2年に1回の世界会議の会場で開催されるようになっており、その間の年は、ESOF (Euro Science Open Forum) の会場で開催されてきました。

2023年のコロンビア会議で延期された年次総会の

次、2024年6月のESOFポーランド・カトヴィツェ市での年次総会も、WFSJ事務局の都合で開催されないことになったため、このままでWFSJの活動が継続できるのか、多くのメンバーが心配していました。特にESOFが2024年3月、主力の資金提供元であったEUから予算の削減を通告され、財政破綻したことが、WFSJにも大きな影を落としています。執行部が財務報告や活動報告ができないと、スポンサーが離れ、事務局の運営費や世界会議開催の費用も維持できなくなるのではないかと、という危惧がありました。

こうした中、6月11日、WFSJ理事会がオンラインで開催され、実務が進められなかったハリー・スルジャディ会長(インドネシア)、ヒメーナ・セラノ副会長(コロンビア)の役職を解いて一般の理事とし、臨時会長にベン・デイトン(英国)、副会長にチャトラ・カーキ(ネパール)、ジョゼフ・メング・ボウム(カメルーン)、書記に、レスリー・エバンズ・オグデン(カナダ)、会計担当理事にジャン・マルク・フルーリー(カナダ)という、新たな担当理事が選任されました。不在の専務理事役は、ジャン・マルク元専務理事がボランティアとして奉仕します。

一方、ハリー会長と、ヒメーナ副会長は、「あらかじめ出席できない」と知らせていた日時に臨時理事会を開くなど、理事会開催は不当、決定事項も承認できない」と新執行部を批判。事実関係解明のため、「第三者機関」の検証を要請しました。

特別会合で新体制を承認

ベンの新執行部と、ハリーたちの旧会長・副会長の対立が鮮明化したことで、各国の団体から疑問と批判が起り、ベン・新執行部は7月5日、「特別会合」を開催。議論の結果、ハリー会長・ヒメーナ副会長問題は、事務局の活動とは別に事実関係を調査する。

一方、会計報告や今後の活動計画決定など、WFSJの活動は中断なく進めるべきだ、として、新事務局を承認する評決(16対9)が示されました。

これを受け、新事務局では新理事候補者を10月4日までに募り、WFSJ会員の相互投票を行い、10月21日に新任の4人を発表。現在の7人に加えて、総勢11人の理事会で、11月20日の年次総会に臨み、承認を得て、次期体制を進めることとなります。

(副会長 小出重幸)

振り返りに始まる30年後への展望

●炎暑下、新会員交えて記念誌づくり

30周年記念パーティーが開かれた7月1日をスタートに「30周年記念誌」をまとめる編集チームへの参加を呼び掛け、これまでに12人が参集した。炎暑の時期ながら、早速編集会議を日本記者クラブで開き、作業が始まった。編集チームは、創設時を知る初代会報編集長の武部俊一さんをはじめ2人の元会報編集長や元塾生の新規会員、JAST賞の受賞者、Webメディアに通じたジャーナリストら多様なバックグラウンドの幅広い年代層で構成され（※）、会員の自主的な活動の場である「検証プロジェクト」の一環として進めていくことになった。

●デジタル化ですっかり変わった仕事の仕方

30年間の歩みを振り返るに当たって、メンバーから気になる問題や関心のあるテーマ、知りたい視点などを自由にあげてもらった。新規会員はJASTJそのものを知るうえで沿革に関心がある。また、この30年間にものごとを伝える仕事の仕方そのものが、インターネットやデジタル化によって大きく変貌したと痛感しているメンバーも多い。

新聞・雑誌などの文字編集の仕事では、原稿用紙の枠目に書き込み、送稿（鉄道便、オートバイ便、電話での読み上げ、ファックス送信など）する方法からインターネットなどによる通信に変わった。写真の撮影や送信も同様。Web情報に頼る取材の仕方、個人での発信など、身近な仕事が大きく変わった点が共通した認識であった。

SNSの発展で真偽が定かでない情報の拡散をはじめ、功罪ともにどのような影響が生じているか。AIの活用で、私たちの仕事はどう変わるのか。こうした問いは共通の関心事だけに、編集メンバーだけでなく、JASTJ会員にも実例や見解を聞くことにした。

●30年の変化で気になるテーマ

振り返りのなかで知りたい、調べたいこととして、メンバーが上げたのは以下の通りである。どのテーマも関心のある会員は多いだろう。

- ・戦争体験した世代記者の核兵器開発、原子力平

和利用への受け止め

- ・天体望遠鏡の発展
- ・気候変動の国際取り組み（COP）の動きと対策
- ・捕鯨問題（食、動物保護）をめぐる対立と方向
- ・放射性廃棄物の処分問題
- ・大地震の発生確率の分かりやすい伝え方
- ・科学ジャーナリズムと科学コミュニケーションの変遷
- ・iPS細胞と先端医療（再生医療、生殖細胞など）の発展
- ・脱炭素と電動化・自動化など自動車世界の変遷



JASTJの歴史を知るため、編集メンバーが参照している年表や会報、10周年記念出版本。

●未来志向、明日に何が起きるか

歴史を知って未来を見つめる。過去だけでなく、「これから人類史、生命史を変える事件、出来事が起きたらどうするかを考えておくことも大事だ」との意見も出された。

知的生命が見つかったときや小惑星の衝突が予測されたときにどう報道するか。数学上の難問解決と残された問いに何があるのか。AIとどうつき合っていくか。量子コンピューターの発展は何をもたらすか。この30年でも思いがけないことが起きただけに、先の30年は何が起きるかを展望しておきたい。記念誌の最終章には、30年後の予測とその時代への向き合い方の提言を会員から寄せていただきたいと願っている。

（※） 記念誌編集チームのメンバーは8月末現在、井内、井上、亀松、佐藤（年）、高木、武部、都丸、中川、中野（直）、西野、藤田（貢）、宮野である。

（理事 佐藤年緒）

活動の源流と人 — 例会、見学会、シンポジウム

● 例会は人脈の宝庫

ジャーナリストにとって人脈は大切な宝ものである。JASTJが主要な行事として開催を続けてきた例会は、その宝庫と言えよう。あらためて数え上げてみると、この30年間に200回を優に超える例会が積み重ねられていた。お招きした200人余の講師たちは、研究者、技術者、行政官、ジャーナリストなど多彩。折に触れてシンポジウムや見学会も催してきた。



第1回例会での講師米沢富美子さん
(1994.10.13、武部俊一撮影)

私たちの知的好奇心を満たし、科学・技術と社会・経済を考える視野を広げていただいたことに感謝を込めて、30年間の例会の一覧表を編集中の30周年記念誌に掲載する予定だ。

例会講師のうち、米沢富美子さん、近藤陽次さん、森茂さん、田中豊一さん、益川敏英さん、高城重厚さん、磯部琇三さん、宅間正夫さん、戸塚洋二さん、海部宣男さん、宇井純さん、有馬朗人さん、北澤宏一さん、遠藤章さん、藤田恒夫さん、倉本昌昭さんの16人（例会登場順）が鬼籍に入られた。あらためてご冥福をお祈りする。振り返れば、多種多様な方々に花を添えていただいた30年だった。

米沢富美子さんはJASTJ設立後の最初の例会の講師として「複雑液体の研究」を講演、のちにJASTJ賞の選考委員として尽力くださった。酸化物質超電導物質の研究で活躍された北澤宏一さんもJST理事長時代にJASTJ賞の選考委員として応援くださった。科学技術庁出身の倉本昌昭さんは科学技術広報財団理事長の時代に、虎ノ門の同財団内にJASTJ最初の事務所機能を提供くださり、のちにJASTJ監事を務めるなど終始サポートしてくださった。

● 研究者の期待を受けて

設立当初から研究者や行政、民間の関係者の応援をいただいた。創刊当時の会報の巻頭言には、外部識者がJASTJの果たす役割に期待する論考を寄せている。江沢洋氏の「科学の総合誌を待望」（第2号）、村上陽一郎氏の「専門家と非専門家をつなぐ役目」（第3号）、松本三和夫氏の「科学技術社会学の視点」（第4号）、廣井脩氏の「あいまい地震情報をどう伝えるか」（第5号）など、その論点はいまでも私たちが耳を傾けるべき点を突いている。

研究者や外部団体の協力を得ながら、シンポジウムを開催した。当初はJASTJの総会に合わせて年1回のペース。「大震災報道『阪神』から学ぶ教訓」（1995.4）、「原子力と報道 もんじゅ事故をどうみるか」（1996.4）「医療と報道 エイズから臓器移植まで」（1997.4）「科学教育はジャーナリズムに何を望むか」（1998.1）、「環境と報道 地球環境問題をめぐって」（1998.4）など、外部団体との共催も含めてこれまでに12回を数える。最近ではオンライントークとして「科学と科学コミュニケーションの未来を語る」をテーマに、日本サイエンスコミュニケーション協会、日本科学振興協会との3者連携でオンライン開催（2022.10.11）するなど形式も大きく変化してきている。

● 人気の見学会

当初から会員に人気のある活動は「見学会」である。これまでに42回実施した。第1回の「サッポロビール（恵比寿）VRで100年前の工場見学」（1994.10）に始まり、「理化学研究所（和光市）有馬理事長と懇談」（1995.6）、「トヨタ自動車・東富士研究所衝突デモ実験」（1995.10）などと、民間も含め研究所や工場見学など、現場を知る機会になってきた。京都、大阪、名古屋、長野、福井など地方都市でのシンポジウムや見学会も行い、さらにすばる天文台（ハワイ、1999.6と2013.5）、ALMA天文台（チリ）とアルゼンチン皆既日食（2010.7）といった海外の天文観測施設見学などの視察も行われた。見学会は、賛助会員の企業や研究所を知る機会にもなってきた。
(顧問 武部俊一/ 理事 佐藤年緒)

日本発の世界標準システムを創る

動物を売るのではなく「システム」を提案

JASTの見学会で6月20日、川崎臨海部にある公益財団法人実中研（旧名称 実験動物中央研究所）を訪ねた。参加者は18人。野村龍太理事長、末松誠所長はじめ所員の方々の話を伺い、腫瘍などの画像解析システムとして世界最大級のMRI設備、英科学誌「Nature」の表紙を飾った霊長類、コモンマーマセット行動観察室等を見学した。

世界最先端のライフサイエンス研究拠点

京浜急行大師線の終点、小島新田駅から15分ほど京浜コンビナート地帯を歩くと、羽田空港の南西方向にあたる多摩川の対岸に実中研はある。実中研は国家戦略特区として整備されたサイエンスパーク、「キングスカイフロント」の第一号進出機関として2011年に研究・事業をこの地で開始した。現在では約80機関が集積する世界最先端ライフサイエンス研究拠点となっている。野村理事長はキングスカイフロントネットワーク協議会会長も務める。

見学会のはじめに野村理事長から経営戦略を聞いた。今年4月、旧名称から新名称 実中研に変更し、研究成果である実験動物を「単体」として提供するだけではない、動物実験システムという「仕組み」として提供する組織へと変わる方針を明確にした。「世界の中で日本の相対的なポジションが下がっていることに対し我々は評論家ではいけない」と35年かけて日本発の世界標準システムを開発。世界の新薬開発に有用な高品質のがんモデルマウス「rasH2マウス」の開発に成功し、世界標準として採用された。実中研では、これら研究成果を知財化しそれを

ライセンスアウトすることにより、研究開発および経営資源を獲得している。

患者に一日でも早く薬を届けたい

続いて、蓄積された知見をかけあわせて新価値を生み出すトランスレーショナル部門の鈴木雅実部門長から、医療業界におけるrasH2マウスを用いた世界標準システムの意義を聞いた。医薬品の研究開発・承認プロセスには9～17年の年月がかかり、新薬の開発成功確率は約3万分の1と言われる。新薬を開発するには臨床試験の前に、非臨床試験と呼ばれるヒトにおける有効性や安全性を予測する。そのために、実験動物を用いて、発がん性試験をふくむ多様な試験を行うという。

従来は、マウスとラットを使って2年以上かけて発がん性試験を実施してきたが、がん発症リスク判定は難しかった。ヒトのがん遺伝子を組み込んだrasH2マウスが、半年で正確に検出する短期発がん性を評価できるとして正式に採用された。マウスを大規模に世界供給できることと、発がん性評価モデルとして品質維持するという相反する条件を両立可能にした結果、実際に世界中で使用され、患者にいち早く新薬が届くことに貢献している。

動物福祉の実践

お話を伺った後、「NOGマウス」の飼育室を視察した。「超免疫不全NOGマウス」と呼ばれる通り、このマウスは拒絶反応を示すことなくヒトのがん細胞、正常細胞を移植でき、ヒトに起こる現象（例えば新薬の毒性反応）の予測を可能にする。その優れた品質は同時に免疫力がないため病気にかかりやすいことを意味し、飼育施設は無菌状態を維持するために室内空気を遮断するビニールアイソレーターシステムを採用していた。

マウスもコモンマーマセットも、眺めていると自然と愛着が湧いてきて、大切に扱われていることをひしひしと感じた。実中研自身が実験動物福祉のための「3R原則」を実践するだけでなく、世界標準システムを確立することで、従来法の代替法となり、使用動物数削減、試験期間短縮の結果、動物の苦痛軽減につながり、世界中の実験動物福祉の実践にも影響を与えていることに感銘を受けた。

（会員 大島泰輔）



実中研のみなさんと参加者たち

大学のガバナンスと「学問・研究の自由」

ボトムアップをとり入れた共同統治が必要

国立大学学費値上げへの社会の関心が高まっている。そうした中で7月4日、科学史を専門とする隠岐さや香東京大学大学院教育学研究科を招いて月例会が開催された。テーマは「大学のガバナンスと『学問・研究の自由』」。隠岐氏は、国際学会議（ISC）において科学の自由と責任に関する委員会の委員も務めている。

学問の自由の危機と国立大学法人法改正の問題点

隠岐氏の話は世界的な「学問の自由」の危機から始まった。

多くの国で、学問の自由度指数(AFD)は2012年から2022年にかけて低下し、冷戦期の1973年と同等にまで悪化している。フランスのルモンド紙には「大学人は危機感を持つべき」との言説が掲載された。ISCの報告は、民主主義と学問の自由は連動するため、学者の組織の自律性は外部からの強制・脅迫・圧力から守られなくてはならないと述べている。強制・脅迫・圧力には政治的・宗教的・商業的利益によるものも含まれる。

学問の自由を守るためには、個人の研究や教育の自由のみならず、大学やアカデミーの自治、すなわち組織の自律的な意思決定が国家の義務として保障されなくてはならない。日本国憲法23条が規定する「学問の自由」は、これら全てを含む。

2023年、国立大学法改正案が国会に提出され、成立した。一定規模以上の国立大学に運営方針会議という合議体を設置してトップダウン運営を推進し、しかも合議体の委員の任命には文部大臣の承認が必要という内容だ。政府介入への危惧から、短期間で約4万筆の反対署名が集まった。問題点は、国立大学のあり方を変える法案が秘密裏に用意されたことにもあったと隠岐氏は言う。合議体の設置は、2022年の「総合科学技術・イノベーション会議」の最終取りまとめに含まれていたが、対象は国際卓越研究大学のみだった。対象の大学をさらに拡大した法改正案の内容が国民一般に示されたのは、2023年9月だ。変更の経緯についての公文書は、事後的に作成された記録のみであった。立法事実が不明なまま、法改正は閣議決定から国会での可決成立までわずか約1か月の「異様なスピード」(隠岐氏)で行われた。



米国を模倣するのなら、共同統治も導入を

隠岐氏は、現在の日本の国立大学では教職員や学生など「下から」の牽制が弱いという。大学執行部と研究・教育・医療の現場との亀裂や対立も目立つ。その中で、学生による国立大学学費値上げへの反対運動が全国的な高まりを見せた。欧州で大学が誕生して以来、キリスト教の権威(例：創造説)や財界産業界・地方の政治家といった学外者に対する教員組合や学生の自治が確立されてきた事実を踏まえれば、日本の学生たちの行動は自然であるということだ。

さらに、「米国の大学のトップダウンを模倣するのなら、共同統治の原則も取り入れるのが筋」と隠岐氏はいう。米国の大学の共同統治では、教員だけでなく職員・学生・院生・卒業生なども参加し、ボトムアップと社会に開かれた議論の仕組みが確立されている。日本の「学問の自由」は、先進国として誇れる状況にはないが、隠岐氏は「この危機は、ボトムアップの仕組みづくりや世界との連携のチャンス」と指摘。教育と研究の質を真に保つために「大学が特定の私企業の意図を反映した研究や教育をしていると見なされる状況を、未来世代のためにも徹底して避けなければ」と強調した。

国民やメディアは、「公共財としての大学を守る当事者」であるということを考えさせられる月例会だった。(会員 石附ななみ)

AI時代のジャーナリズム 変わり始めた取材・編集の現場

日進月歩の生成AIの進化でジャーナリズムの現場が変わり始めている。「AI時代に記者や編集者は生き残れるか?」と題して、8月22日に東京・内幸町の日本プレスセンター会議室で、月例会がZOOM 中継とのハイブリッド方式で開かれた。会員でウェブメディアに詳しい亀松太郎さんが講師を務め、「AIが書いた」実例に加えて、会場でもAIとのやり取りで記事を作る実演を披露した。

人間の仕事は奪われる?

亀松さんは米半導体大手エヌビディアCEOジェンソン・フアン氏の言葉を引用した。「AIが君たちの仕事を奪うんじゃない」とフアン氏は言う。ただ、「AIを活用する人が君たちの仕事を奪うのだ」と。コンピューター、インターネット、そしてAI（頭文字を取って亀松さんはCIAと呼ぶ）は、今や知的職業人の三種の神器だと亀松さんは考える。

中でも注目の生成AIは、2022年にChatGPTが登場して以来、名だたる米テクノロジー企業がしのぎを削る。インターネット上の膨大なデータから人間の思考に近い学習によってパターンを憶え、文章や画像を生み出すのが生成AIの特徴だ。

日本語能力ではChatGPTに勝ると評判のClaudeを主に使って、①記事の作成、②記事の編集・校正、③タイトルの考案、④翻訳の作成・レビュー、⑤写真の描写という5つの使用例が披露された。

亀松さんは現時点の生成AIを「大学3年のインターン生」と表現する。学生のように間違っている可能性もあるが、何でも素直に聞いて手足のように働いてくれると。亀松さんのプロンプト（指示）で、



AIによる記事作成の実例を示しながら話す亀松太郎さん
(撮影 都丸亜希子)

Claudeは即座にSF小説や記事を書いてみせた。

南海トラフ地震臨時情報に関する気象庁のプレスリリースを元にした記事に対しては、「間違いではないが見出しがミスリードだ」「数字は合っているのか」など、会場がデスクと化す場面もあった。

音声認識による文字起こしとの組み合わせで講演動画の記事化も簡単。誤字脱字の修正といった校正作業もほぼ完璧。「中学生にも理解できるように」とプロンプトを入力すると、難解な記事が瞬時にひらがなの多いわかりやすい文章に編集された。

タイトルの考案を頼めば、20個でも100個でも提案してくる。自分では思いつかない様々なパターンからヒントを得て最終案を捻り出すのは生産的とも言える。翻訳も得意で、日本語の記事が瞬時に英文化され、外国語の資料を和訳して読むこともできる。

写真の描写も巧みだ。「おそらく画像認識による言語化」を経て、充実したキャプションが生成される。「速報性が要求される現場で、写真をAIに描写させる方法もあり得る」と亀松さんは語った。

問われる真の役割

このようにAIの実力を実際に示した後、亀松さんは、「AIの進化により淘汰される記者・編集者は確実にいるだろう。一方、自分にしかできない強みを活かして新たに活躍の場を見出す記者・編集者もいるのではないか」と述べて話を締めくくった。

質疑応答の中で「未熟な記者の育成のために、AIの使用について研修などでどう指導すればよいか」という質問が出た。それは、JASTJのJ塾で言えば、「下手な文章を何回も苦労して直す経験をすべきなのか、最初からAIを活用したほうがよいのか」という問いにもつながり、さらに議論を呼びそうだ。

また、「AIを使って記事が書けるのなら、新聞社の役割は何なのか?」という質問に対して、亀松さんは「記事を書くことが記者の仕事ではなく、社会にとって重要だが隠されている事実を見つけ、伝えることに本当の価値があるのではないか」と答えた。

AI時代にもジャーナリズムは決してなくならない。その担い手は、記者や編集者に限らず、三種の神器CIAを使いこなしつつ、人間にしかできない仕事を模索する必要があると思う。(理事 井内千穂)

“紅麹問題” 混乱の背景

2024年3月、小林製薬は3年前から販売してきた健康サプリメント「紅麹コレステヘルプ」の摂取者に腎機能障害などの健康被害が出ていると発表。5月末までに1603人が受診、278人が入院治療を受ける大がかりな被害が発生した。これを受けJASTJは4月19日、会員の唐木英明・東大名誉教授を招き「井戸端会議」を開いた。唐木さんが代表を務める「食の信頼向上をめざす会」との共催で、約130人が参加した。

厚労省は紅麹菌培養過程で混入した青カビが作る「プベルル酸」化合物が原因との可能性を指摘。これが動物実験で腎機能障害を起こすことも報告している。唐木さんは、製造過程の安全管理、被害の報告遅れや商品回収プロセスの混乱などに触れ、経緯や責任の所在、リスクの現状を整理した。同時に、原因の特定には時間がかかり、継続したフォローが必要だとした。

一方で、混乱の背景には行政の複雑さ、消費者の

理解不足、業界の利害など、複合した課題があると説明。ひとくちに健康食品と言っても、食品表示法の規制を受ける「特定保健用食品」、「栄養機能食品」、「機能性表示食品」と、規制を受けない「いわゆる健康食品」の4種類があり、それぞれ効果判定、安全性確認方法も違う複雑さがある。健康被害の大半は、今回の機能性表示食品（紅麹）ではない「その他の健康食品」で発生していることをあげ、「解決には健康食品全体を包括する法律が不可欠だ」と強調した。

複雑なテーマが分かりやすく交通整理され、米国など国外の規制はどうなっているか、効果と安全性の検証方法、行政の縦割りの弊害など多くの質問が出た。唐木さんは「健康被害の焦点は“錠剤サプリ”と呼ばれるその他の健康食品で、改善には業界が足並みをそろえることが欠かせない」「健康食品は現実に国民の8割が利用しており、法律の整備が急がれる」と答えた。（理事 小出重幸）

サイバー攻撃は防げるか

井戸端会議「サイバー攻撃デモンストレーション～ランサムウェア感染シナリオ～」を4月10日にオンライン開催した。サイバーセキュリティ・ソリューションを提供する世界的な企業、クラウドストライク社のコンサルタント白石三晃さんを招き、「合いの手」はJASTJ理事の森時彦が務めた。

同社は、日本でも大手の銀行やメーカー、地方自治体などにサービスを提供している。白石さんは同社のプリンシパルコンサルタントで、企業などのシステムの脆弱性を検証するレッドチームを率いている。クライアントの依頼を受け、そのシステムに侵入を試みるホワイトハッカーだ。

脆弱性検証のためのプロによるサイバー攻撃は、ある会社員のパソコン（PC）へのウイルス感染から始まる。そこから同僚や上司へと感染が広がる。乗っ取ったPCの権限によってどんなデータにまでアクセスできるかが決まるので、より権限のある人へと社内感染を進める。データセキュリティがいくらしっかりしていても、管理責任者のPCが乗っ取

られればゲームオーバーだ。最終的にドメインコントローラーを乗っ取れば何でも可能になる。

サイバー攻撃からの防御の第一段階は、最初の感染を防ぐことだ。企業内のセキュリティがいくらしっかりしていても、取引先の中にはセキュリティの悪いところも少なくない。そうした弱いところが狙われる。物理的に隔離しても、レッドチームは内部者を装ってそこへの侵入も試みる。

こうしたウイルス感染シナリオの説明が終わった後、参加者との間で「人質に取られたデータは回復可能か?」「クラウド上のデータは安全か?」「WINDOWS 11は安全か?」「能動的サイバーセキュリティは必要か?」等の質疑応答が交わされた。AIの登場でサイバー攻撃はより頻繁かつ巧妙になっている。AIはもちろん防御にも使われるが、サイバー攻撃とのイタチごっこは続く。

絶対に守れるシステムはない。自分のデータもいつ盗まれるかわからない。すぐそばにある目に見えない危機に意識を新たにした。（理事 森時彦）

「真似事」を乗り越えて

思えば高校時代は新聞記者に憧れた。しかし、新卒時はバブルの狂騒の中で金融機関に就職し、夫の海外転勤に伴い退職という人生の紆余曲折。14年の専業主婦期間を経て見つけたアルバイト先が英字新聞社の学芸部だった。40代主婦を雇ってもらえた感謝もあって新卒時より必死で働き、署名記事を書き始めた頃、ある記者から言われた。「新聞社でバイトしていると記者の真似事ができるね」と。はて？私書いた記事は真似事なのか。やがて正社員になり、通算10年の新聞社勤務を経験したが、「真似事」という言葉は棘のように刺さったままだった。

東日本大震災をきっかけに原子力の問題に関心を持ち、フリーランスになってからJASTJに出会った時、その間口の広さと懐の深さに感激した。そして迷わず科学ジャーナリスト塾に参加。錚々たる講師陣のご指導の下、まとめた自分の作品「中高生と考

える『核のごみ』問題」は、コロナ禍中に飛び込んだ大学院で、修士論文「放射性廃棄物の処分問題への市民参加の可能性——環境倫理学の観点から」へと発展した。少なくとも「真似事」ではない。

この春、JASTJの理事にと打診をいただいた時は心底驚いた。奇しくもJASTJ30周年。1994年12月発行の会報第1号を紐解くと、「科学ジャーナリスト会議の一員であることが、知識、職業倫理などあらゆる意味で一流のジャーナリストであるか、あるいは一流のジャーナリストたらんと努力している証明といえるような、そんな未来が描けたら素晴らしい」とある。回り道して辿り着いた「場」には、高校時代の憧れを超える多彩な人々が集う。その多様性にいくぶん寄与しつつ、先人に学び、原子力をめぐる問題を考え続けたいと思う。ジャーナリストたらんと背筋を伸ばして。 (新理事 井内千穂)

JASTJ をサポートする 賛助会員・団体一覧

(50音順、2024年9月現在)

 <p>JAMSTEC 国立研究開発法人 海洋研究開発機構 Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology</p> <p>国立研究開発法人 海洋研究開発機構</p>	 <p>構造計画研究所 KOZO KEIKAKU ENGINEERING Inc.</p> <p>株式会社構造計画研究所</p>
 <p>花王株式会社</p>	 <p>CIEM 公益財団法人 実中研 Central Institute for Experimental Medicine and Life Science</p> <p>公益財団法人 実中研</p>
 <p>国立研究開発法人 科学技術振興機構 Japan Science and Technology Agency</p> <p>国立研究開発法人 科学技術振興機構</p>	 <p>大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 Research Organization of Information and Systems</p> <p>大学共同利用機関法人 情報・システム研究機関</p>
<p>CACTUS</p> <p>カクタス・コミュニケーションズ株式会社</p>	 <p>一般財団法人 新技術振興渡辺記念会</p>
 <p>KEK 高エネルギー加速器研究機構</p> <p>大学共同利用機関法人 高エネルギー加速器研究機構</p>	 <p>TECH VENTURE</p> <p>株式会社テックベンチャー総研</p>

理事会から

6月理事会は6月4日午後7時からオンラインで開いた。一般社団法人溶接協会の賛助会員入会を承認した。滝事務局長から科学ジャーナリスト賞の一次選考の進め方を改め、J賞委員会を中心に行うとの説明があった。会員からの推薦受付は従来通り。室山会長から8月例会について「AI時代に記者や編集者は生き残れるか」（講師は会員の亀松太郎さん）の提案があり了承された。9月以降の月例会の候補に関し説明があった。小出国際委員長から6月ポーランド開催の「ユーロ・サイエンス・フォーラム」に会員の小島あゆみさん、清水健さんが参加予定との説明があった。高橋副会長から30周年記念パーティーのプログラムの説明があった。

7月理事会は7月2日午後7時からオンラインで開

いた。冒頭に高橋副会長から30周年記念パーティー開催結果に関し報告があった。室山会長から10月例会は岩坪威東大教授を講師に認知症をテーマに開きたいとの提案があり了承された。瀧澤編集・広報委員長から9月会報の内容について説明があった。小出国際委員長から世界科学ジャーナリスト連盟執行部の混乱に関して説明があった。一部理事が6月に現会長らを解任し新執行部を立ち上げる事態になった模様。またユーロ・サイエンス・フォーラムに参加の会員らの報告によると、同フォーラムは財政破綻の状態にあることがわかった。JASTJ国際委員会としては、情報収集に努め逐次理事会や会員に報告するとした。8月理事会はお休みとした。

<p>いのちをつなぐ SARAYA 東京サラヤ株式会社</p>	<p> 一般社団法人 日本溶接協会 一般社団法人 日本溶接協会</p>
<p> 東京理科大学 Tokyo University of Science 東京理科大学</p>	<p>ひとりを守る みんなを守る BIKEN 一般財団法人 阪大微生物病研究会</p>
<p>TOSHIBA 株式会社東芝</p>	<p> 国立研究開発法人 物質・材料研究機構 National Institute for Materials Science 国立研究開発法人 物質・材料研究機構</p>
<p> 公益社団法人 日本アイソトープ協会 Japan Radioisotope Association 公益社団法人 日本アイソトープ協会</p>	<p> 理化学研究所 国立研究開発法人理化学研究所</p>
<p> 株式会社日本医工研究所 Japan Medical Engineering Institute 株式会社日本医工研究所</p>	<p> QST 国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構</p>
<p> JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE 日本学術振興会 日本学術振興会</p>	<p>ROHTO ロート製薬株式会社</p>

■ 新入会員の自己紹介

日本溶接協会

石油／石化プラントの供用開始後の維持管理技術について、最新の破壊力学、現場品質管理技術や検査評価技術等を軸に議論研鑽しています。幅広い観点と透明性が技術議論の基本ですので、色々と学ばせていただければと思います。

古川 雅子〈フリーランス〉

上智大学卒。ニュース週刊誌AERA「現代の肖像」執筆多数。著書に「『気づき』のがん患者学」(NHK出版新書)など。2024年、Yahoo!ニュースオリジナル特集「経口中絶薬に関する3回連載」で「科学ジャーナリスト賞2024」優秀賞受賞。

田代 健〈地球堂薬局〉

薬局を営んでいる薬剤師です。薬物治療における患者の意思決定を支援するためには、単なる科学的な客観性だけでは不十分で、データそのものや根拠の形成過程に関する人文的・社会的な背景も理解することが必要だと考えております。

高木 真人〈公益社団法人日本工学会 理事〉

電機メーカーで半導体の研究開発、オープンイノベーションを所掌した後、現在は学会の役員、文部科学省の科学技術政策の審議会委員の他、科学者と政治家の相互理解を深める取り組みをしています。よろしくお願いたします。

木下 岳士〈丸善出版〉

編集者として生命科学、地球科学、医学などの分野を中心に専門書を担当しています。様々なジャンルの書籍を担当しましたが、勉強不足を感じていました。科学的な知識以外にも、伝え方なども学びたいと考えています。

堀内 信彦〈科学技術振興機構 アジア・太平洋総合研究センター〉

現在、中国の科学技術情報を日本語で紹介するサイト「Science Portal China」の編集長をしております。スキルアップを目指し、科学ジャーナリスト塾に参加したいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

大林 由尚〈東京大学情報基盤センター〉

スーパーカミオカンデや加速器を使った大型科学実験に携わる中で、コミュニケーションの大切さを痛感し、2012年より研究機関広報を行なっています。コミュニケーションスキル向上、ネットワーク作りを目指して入会希望しました。

織茂 聡〈国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構〉

家族は配偶者と長男、長女、二男、母の6人家族で横浜在住。趣味は海外旅行一人旅(バックパッカー)、および新聞を読むこと。

三輪 海彩〈パナソニックコネクティブ株式会社(10月から)〉

学生時代に理化学研究所で原子核物理を専攻しており、科学の面白さに魅了され、展示などで科学を伝える仕事に就きたいと思いました。表現方法を学ぶために、ソニーでエンジニアとして働き、退社後もメーカーで技術を学びながら何か科学に関われないかを模索しております。

水上 裕樹〈合同会社CODEAID〉

ITエンジニアの社会貢献として子供向けにプログラミング教育活動を始め、地元コミュニティFM局で子供向けの番組を幾つか放送してきました。

編集・発行

 **日本科学技術ジャーナリスト会議**
Japanese Association of Science
& Technology Journalists (JASTJ)

会員の BOOKS

新刊紹介

「新時代の電力システム
ーそのグランドデザインを考える」

関根泰次(編・著) 松田道男 鈴木 浩
大来雄二(著)

(NPO法人次世代エンジニアリング・イ
ニシアチブ・1800円+税)

エネルギーシステム、中でも電力システムは多面的な役割を担う社会インフラだが、その役割は時代とともに社会側と電力システム側の相互作用で変化している。電力システムの果たすべき役割は時代によっても、この地球上の場所によっても大きく変わる。

わが国の電力システムは、発電側も需要側もそして地球社会も大きく変貌する中で、戦後高度成長期と現在とは取り組むべき課題が質的に異なってきている。電力システムには一瞬の障害で全系が崩壊しかねない特質と、電源や送電網の整備には何10年もかかる特質が共存しており、その特質を踏まえた制度設計や研究開発が重要である。私たちは今こそ具体性のある戦略と戦術を必要としている。



(会員 大来雄二)

「老化と寿命の謎」

飯島裕一(著)

(講社現代新書・1034円)

超高齢社会の中で、大きな関心事である老化・寿命について全国の研究者、臨床医に取材。記者の目と足でつづった報告です。信濃毎日新聞科学面連載の書籍化で、デスクは会員の磯部泰弘が担当しました。

長寿の動物を追い、寿命を左右する基礎代謝量(体重・体温)などを取り上げた第1章、基礎老化化学をベースに老化のメカニズムに迫った第2章は、老化研究の最先端です。一方、第3章では、フレイル、ロコモ、認知症、パーキンソン病、睡眠、皮膚のかゆみ、白内障、嚥下障害といった身近な加齢関連疾患とその周辺に迫りました。

「医学の土俵」にこだわり、70枚以上の図・表・イラスト、写真も使ってビジュアル化しました。



(理事 飯島裕一)

科学教育の必要性を痛感しており貢献したいと考えております。

秋山 優子〈EY新日本有限責任監査法人〉

私は現在、EY新日本有限責任監査法人で公認会計士としてIPO支援業務に携わっています。JASTJへの入会により、科学技術への理解を深め、会社のビジネス理解に活かすとともに、会員同士の交流を通じて見識を広げたいと考えています。

堀 良通〈(株)ペガシス 取締役〉

私は大学で植物生態学の教育・研究に従事してきました。現在は研究から離れ、動画編集アプリ開発の会社役員と共に幾つかの行政機関の委員並びに日本学生科学賞中央審査総合委員などをしております。私は、社会のサステナビリティで最も重要なものは、命であり、生命の連続性だと考えます。そのためには、個人々の環境や社会への関心と理解を正確な科学的知識に基づいて深めることが最も大切だと考えています。

退会

塚本 昌紀 渡辺 政隆 小野 梨奈 山田 豊
森永 智子 藤本 瞭一

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1
日本プレスセンタービル8階848
Email: hello@jastj.jp
会長 室山哲也／事務局長 滝順一
編集長 瀧澤美奈子／副編集長 鹿児島昌樹